

# 言語と認識 (I)

—ウォーフの言語相対性原理—

牧内 勝

はしがき	II 言語相対性原理
I 言語構造論	A 中心テーゼ
A <型> の概念	B 具体例
B <類推> と <比喻> の概念	C 問題の所在
	あとがき

## はしがき

<言語> と <認識> との関係は、古くから、哲学、心理学、人類学、言語学などの各分野で熱心に探究されてきた。その代表例として、近代ではヘルダー (J. von Herder) とフンボルト (A. von Humboldt), 現代ではカッシラー (E. Cassirer), ワイスゲルバー (L. Weisgerber), ウィトゲンシュタイン (L. Wittgenstein), それにピアジェ (J. Piaget), レヴィ=ストロース (C. Lévi-Strauss) たちの名を挙げることができよう。

米国のウォーフ (Benjamin Lee Whorf)(1897~1941) もその一人である。彼は自己の見解を <言語相対性原理 (linguistic relativity principle)> の名で発表した。その言語思想は師のサピア (E. Sapir)(1884~1939) に負うところが多いため、一般には <サピア=ウォーフの仮説> の名で知られている。<sup>(1)</sup>

この原理は、発表当初から今日に至るまで、上述の各分野に多大な反響を呼び起し、賛否両論が数多く提起されて来ている。<sup>(2)</sup>しかし、いまだにこの原理に対する〈決定的な〉論証が生まれていない背景には、〈言語と認識〉という課題自体の複雑さ、困難さにも原因が潜んでいようが、他面、この原理そのものが粗描の段階で終止し、体系的な理論として十分発展されないうちに発表者自身が世を去ってしまった事情によることも確かである。

にもかかわらず、ウォーフの言語・思考・行動などに関する洞察は鋭く深い。十分体系化はされなかったが、問題の核心に迫った成果が得られており、その基本的な考え方、アプローチの仕方は、今日の〈変形生成文法理論〉の一つの源流となっていると見て差し支えない。

筆者が当小論で言語相対性原理をとりあげ、吟味・検討を加える理由は、主として二つある。一つは、今日の変形生成文法理論の視点と成果をもとに、この原理をもう一度見直してみたいという、言語学史的な関心のためであり、また一つは、筆者が〈言語と認識〉のテーマのもとに現在進めつつある実証的研究を、上述の代表者たちをも含めた〈理論的座標〉の中に位置づけてみたいという、理論上の必要性からである。

ウォーフの言語相対性原理を正当に評価するためには、まず彼が〈言語構造〉自体をどのように把握しているか知る必要がある。そこで第I章では、彼の言語思想の中核となっている〈型 (pattern)〉の概念を、更に〈類推 (analogy)〉と〈比喩 (metaphor)〉の概念を検討する。

ウォーフの言語構造論を踏まえた上で、第II章では、言語相対性原理をとりあげ、彼が言語・思考・実在などをどのように関係づけているか、具体例を参照しながら吟味する。

従ってこの小論は、〈言語と認識〉に関して新しい理論を提案したり、展開したりするものではなく、先人のものを十分咀嚼して、このテーマにまつわる諸問題を明らかにしてみることが狙いである。

注

(1) サピアとウォーフの両者の、言語思想のオリジナリティや異同等の比較研究は、当テーマとは直接関係がないのでとり扱わない。ウォーフの言語思想のみに焦点を合わせている。

(2) 当論文では、〈サピア=ウォーフの仮説〉に対し過去に出された賛否両論を、いちいち検討する方法はとらなかったが、*Caroll* (1956) にはその要約が記されており、参考になる。

## I 言語構造論

### A 〈型〉の概念

ウォーフは、宇宙に存在する固有の実在体は、すべて〈型の体系〉をなしているとする。すなわち、言語も、思考も、行動や文化も、更に自然も、すべてがそれぞれ個別に、もろもろの型を内在する一体系をなしており、これらの実在体は階層的に配列され秩序づけられながら、更に高次の、超空間的で直観によってのみ把握できる世界 (noumenal world) において結合され統合されている、と考える。しかも、ウォーフに特徴的な点は、このさまざまな実在体をもつ、未知でぼう大な宇宙の〈姿〉は、まさしく〈言語〉の中に、その〈徴候・予感 (premonition)〉が見い出される、という壮大な言語中心の宇宙観である。<sup>(1)</sup>

従って、この宇宙観によれば、言語に内在する型の体系を明らかにすることが、宇宙を正しく認識する道を開くことになる。〈言語体系〉を十分正しく理解することによって初めて、これと他の実在体との関係や、他の実在体自体のもつ体系を知ることが可能になる。

以上がウォーフの言語観の中心的思想であるが、更に詳しくその内容を検討するため、以下の順序でその特色を考えてみる。(1) ウォーフの言う言語の〈型〉は、〈規則〉または〈法則〉と言い変え得る内容をもつ；(2) 一般の人々は、

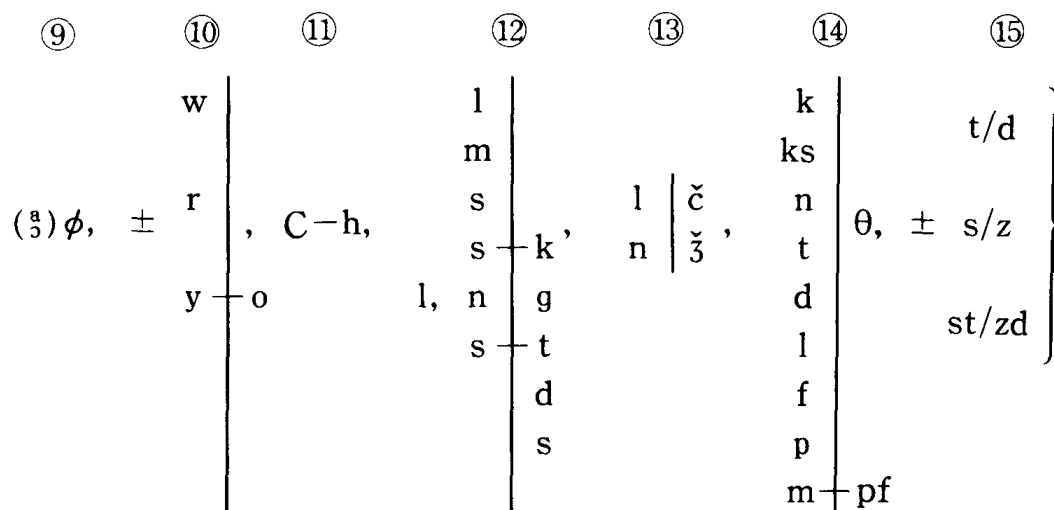
この型に気づかず、〈無意識に〉用いているし、この型は〈強制的に〉機能し、われわれの考え方、話し方を規制する。

(1) 〈法則〉としての〈型〉

言語の〈型〉は、言語に内在し、かつ相互関係を保持している〈あらゆるレベル〉に見い出される。<sup>(2)</sup>すなわち、生理的・物理的な〈音声〉のレベルに始まって、〈音韻〉、〈形態音韻〉、〈形態〉、〈統辞〉、更に上位の〈意味〉のレベルに至るまで、それぞれが独自の型からなる体系をもち、これら全体が、〈型の総合体系〉、すなわち〈文法〉を構成する。

このようなウォーフの〈型の概念〉が、もっとも明瞭な形で表現されているのが、英語の音に関する例である。(その他の例は、どちらかと言えば、断片的・素描的で、未完成のものが多い。)そこで、多少煩わしくなるが、英語音に見い出された〈型〉の例を、やや詳しく考察してみよう。ただ、英語音に関する型と言っても、その全体ではなく、アメリカ中西部標準語で使用される〈単音節語 (monosyllabic words)〉という、極く限られた範囲の英語音に見い出される型の例である。以下が、この型を〈構造式 (structural formula)〉として表現したものである。(説明の便宜上、ウォーフの原型と本質的に変化しない程度に、修正してある。)<sup>(3)</sup>

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
{		g   l	h	h	k   w	k	+ V+	
		k   l	g	k	t   r	t		
	φ, C-ŋ,	š	t	g	t	r		s
		d   r,	d	f	y(u), s±	p   l		l
		θ	θ	v				n
		f   l		p				f
		b   l		b				p
				m				m
						w		



この構造式の解読法は次の通りである。式は全部で 15 項目からなり、中心の V (母音) の前 (①~⑦) と後 (⑨~⑮) とに大別できる。コンマ (,) は、くまたは (or) を意味し、従って、各項目は選択されてもされなくてもよい。ただし、(+) 記号のある前後の項目は、必ず選択されなければならない。ϕ (①と⑨) はゼロを、C (子音) -ŋ (②) と C-h (⑪) は、マイナス記号を付された子音 (ŋ と h) 以外のあらゆる子音を意味する。タテ線の前後の音 (③~⑦, ⑩, ⑫~⑭) は、もしヨコ棒 (-) で結合されていれば必ずその結合で結ばれ、なければ前後の順序は保ちながらも自由に結合される。

以上の方法で解読すると、当該の単音節語には、次のような特徴が見い出される。(a) 必ず母音が含まれている (⑧); (b) 母音で始まる音はなく、必ず子音か半母音 (w, y) で始まる; (c) [ŋ] は決して語頭に現われない (②); (d) 母音で終る語はあるが、その場合は必ず、[a] と [ɔ] の二音に限定される (⑨), などである。

例えば、'shred' は、šr (③)+e (⑧)+d (⑪)=[šred] という結合関係で示され、'thred' も同じ項目の結合により [θred] となる。三つの子音結合で始まる語、たとえば、'spring', 'splash', 'straw' などは、⑥+⑧+⑪ (または⑨) の結合により、それぞれ、[sprɪŋ], [splæʃ], [strɔ] となる。また、'gulch', 'lunch', 'lounge' などは、②+⑧ (または⑩)+⑬の結合により、それぞれ、

[gʌlč], [lʌnč], [lawnʒ] となる。

以上は、米国中西部標準語に現われる単音節語が、どのような〈音の型〉をもっているか〈構造式〉で示したものであるが、これは、英語全体に内在する型の極く一例に過ぎない。しかも、ウォーフ自身言明している通り、この式は、他の記号を用いてもっと簡潔に表現することも可能である。かつ、この種の構造式を、言語のあらゆるレベルで見い出される型にも適用することが、ウォーフの目標である。従って、ここで、この種の構造式の背後にある〈原理・原則〉を考察することが肝要となる。以下に、その三点だけを記してみたい。<sup>(4)</sup>

(a) 産出性。まず当該の〈データ〉を、くまなく〈すべて (all)〉含み、しかも、現われ得るもの〈のみ (only)〉を記述する。上例で言えば、約束(解読方法)に従って構造式を適用すれば、米国中西部標準語の単音節語の音型の〈すべて〉が、しかも、現われ得るもの〈のみ〉が答として出て来る性格のものである。たとえば、上の式から 'shred' 'thred' は出て来ても、\* 'shled', \* 'thled' などが出て来ない。この原理は、今日の生成文法で用いられる〈規則〉がもつ〈産出性 (generativity)〉と本質的に等しい。

(b) 予測性。従って、当該の英語音として現われ得る結合と、現われ得ない結合とを〈予測〉できる。すなわち、あるアメリカ人が、必要があって新語を造っていると仮定しよう。われわれは、この人が造り出す語の音結合を予測し、たとえば、'plob' という語は造っても、'pfob' という語は造らないだろう、などと言える。アメリカ人は、この意味で発音上の〈制約〉を受けていることになる。この〈予測性〉こそ、いかなる科学も目指している到着点である。

(c) 正確性。上例のような構造式の導入によって言語学に〈正確性〉または〈厳密性〉を期待することができる。これも科学として成立するための要因であって、欠くことができない。この正確性を期するため、言語学でもいろいろな〈技術〉が開発される必要があるが、上例の式は、改良の余地はあるとしても、基礎作業として十分評価できる性格をもっている。

以上に掲げた、ウォーフの構造式に関する三つの原理・原則、すなわち、〈産

出性〉, 〈予測性〉, 〈正確性〉は, いずれも今日の変形生成文法の理論の中に組み入れられ, 一段と発展させられているとみることができる。変形文法は, 端的に言って, 〈規則〉と, これによって産み出される〈表示 (representations)〉の体系であるが, その規則の〈原理と目標〉は, ウォーフが〈型〉として追求しているものと, 本質的には異っていない。言語に, 〈型〉または〈規則〉を見出し, それを〈記号式〉で表わそうとする試みは, なにもウォーフが最初ではなく, 紀元前数世紀の頃, すでにインドの〈パニーニ文法 (Panini grammar)〉で始められているが, ウォーフにおいてこの伝統が再び開花し, 更に今日の生成文法に引き継がれ, 発展させられていると言えよう。

更にウォーフは, 上述のような原理にもとづく〈型〉, 〈構造式〉を, 上例のような音韻のレベルだけでなく, 他のあらゆるレベルでも見い出そうとしたが, 特に〈文の型〉の重要性を強調している点, やはり今日の生成文法と共通する。<sup>(5)</sup>それが重要である理由は, 下位レベルの単位 (形態素, 単語, 句など) の〈意味〉を規定するからである。ただし, 彼の主張する〈文の型〉は, アメリカの〈構造主義言語学〉にもとづく言語教育法である〈オーラル・アプローチ〉で用いられる〈文型〉とは本質的に異なる。もっと抽象的・普遍的な型を意味する。それは「もろもろの文の方式 (schemes) および文構造の構想 (designs) のようなもの」<sup>(6)</sup>であって, 個々の文のもつ型ではない。この〈文の型〉は, 構造式で表わされるまでに至らなかったが, ウォーフの意図するところは, 当然上述の原理に則したルール化であり, この点でも生成文法のアプローチと本質的に異ならないし, 後者によって発展させられているとみることができる。

このように, 〈法則〉としての〈型〉が, 言語の各レベルに存在し, 相互に階層的な配列をなし, 上位レベルが下位レベルを規定している, というウォーフの基本的な言語構造論は, 定式化されていないものがありながらも, 首尾一貫したものである。

## (2) 〈背景〉・〈強制〉としての〈型〉

言語に見い出される〈法則〉としての〈型〉は、上例からもわかるように、極めて抽象的で、しかも複雑多岐にわたるものであって、一般の人々には〈無意識〉のまま使用されているのが事実である。この事実をウォーフは「型は背景的 (background) である」と繰り返し指摘する。<sup>(7)</sup> 更にこの〈型〉は、その使用者に対し〈強制力〉をもっている点は、すでに音韻の型のところで触れた通りである。しかも、このような母語の型は、幼少の頃、すでに内在化してしまっている。

〈型〉がこのように〈背景的〉〈強制的〉な性格をもっている事実に即し、ウォーフは外国語学習上の心得を述べているが、興味深い。それは、〈母語の構造式〉をまず最初に教え(または学び)、それによって学習者が、自己のうちに内在化され、無意識化されている〈母語の型〉を〈半意識化〉してしまう。その結果は、今まで〈強制力〉をもっていた〈型〉が、その〈拘束力〉を失い、学習者はその〈型〉に対して〈自由〉になる。母語の型に対して自由になったところで初めて外国語を導入すれば、「内的な抵抗なしに (without inner opposition)」習得できる、という主旨のものである。<sup>(8)</sup>

一見乱暴な外国語学習法のようなのだが、すでにみた通り〈型〉が〈背景的〉で〈強制的〉である点を事実として認める限り、当然とらなければならない方法である。構造式の教え方や、教える年齢など、細部にわたるプログラムは、外国語学習の具体的な状況の中で判断され、作成されなければならないが、外国語学習に関するウォーフのこの〈基本的見解〉は、理に叶ったものながら、今日なお、関係者の間で十分理解されていない。

## B 〈類推〉と〈比喩〉の概念

〈型〉の概念と同様に、ウォーフの言語構造論の中で重要な位置を占めている概念は、〈類推 (analogy)〉と〈比喩 (metaphor)〉である。ウォーフがこの両



概念を特に問題とする理由は、両者が「平均的ヨーロッパ標準語 (SAE= Standard Average European languages)」<sup>(9)</sup>の特徴であって、アメリカ・インディアンの言語（少なくともホープ語）では欠落または不足しているからであり、同時にこの言語事実が、人間の〈思考〉や〈行動〉に影響を及ぼしていると考えられているからである。

(1) まず〈類推〉の例として、彼が保険会社勤務中に目撃した実例を若干挙げてみよう。<sup>(10)</sup>

(a) 「空の (empty) ガソリン罐」からしばしば火災が起る。これは「空の」という〈言葉〉から、「危険ではない」という〈状況〉が類推されるためである。すなわち、「空の」の本来の意味である「気体・液体・固体などのゴミや残りものが無い」から「何もなく、不活性で、危険ではない」状況が類推され、タバコの吸いがらが落される。ところが実際は、ガソリンの残りが少しあったため、火災が発生した。その他の例：(b) 「つむぎ石灰 (spun limestone)」の「石 (stone)」から「不燃性」；(c) 「窯が火に接触している (on) か接触していないか (off)」から「火に接触していなければ安全」；(d) 「水たまり (pool of water)」から「水分があり (watery) 安全」などと類推され、火災が発生した。

以上の実例では、ある〈特定の状況〉を説明するために、〈不正確・不適當〉な言葉が用いられたことが原因で人々が〈誤った行動〉をした、という点にポイントがあるのではなく、使用された〈言葉〉が、その言葉の使用者に様に〈習慣的な類推〉と、従ってまた、〈習慣的な行動〉を引き起す結果となった点にある。〈言葉〉に関する限り、同一の言葉が、意図された本来の意味と、類推された意味、という二つの別個な意味で用いられているにもかかわらず、われわれは、この両者を〈無意識に〉〈習慣的に〉結合し、混同してしまう事実を説明している。言葉は、あくまでも〈地図〉であって〈現地〉ではない、と指摘する〈一般意味論〉の主張と共通した洞察である。

(2) 言語における〈比喩〉の必要性と、その方法について、ウォーフは次のように述べている。「談話を現実のさまざまな状況に合わせるために、あらゆる言語は、持続 (durations), 強度 (intensities), および傾向 (tendencies) を表現する必要がある。SAE や、おそらく、その他の多くのタイプの言語では、それらを比喩的に表現するのが特徴的である。その比喩は、空間事象の延長である。すなわち、大きさ、数(複数性)、場所、形態、運動などにもとづいて作られる。」<sup>(11)</sup>そして、比喩表現があまりにも日常茶飯事となっているため、「われわれはごく単純な非空間的状況すら、たえず物理的な比喩に頼らないでは言い表わせない」。<sup>(12)</sup>

ウォーフの挙げている実例の中から、その例を二つだけ引用してみよう。<sup>(13)</sup>

(a) 英語では、同一の複数用語が、〈現実的〉と〈想像的〉の二つの意味で使われている。例えば、基数の複数〈10 (ten)〉は、〈10人 (ten men)〉の表現では、空間的・客観的に経験できるので〈現実的複数〉であるが、〈10日 (ten days)〉の表現では、そのような経験は不可能であって、記憶とか想像などに頼らざるを得ない〈想像的複数〉である。この後者の表現が比喩である。

(b) 次の談話は、大部分が比喩で表現されている。「私は他人の議論の筋道 (thread) を把握 (grasp) する。しかし、もしその水準 (level) が頭越し (over my head) で理解できない場合は、私の注意は横道にそれて (wander), その流れ (drift) と接触を保てなくなる (lose touch) かも知れない。その結果、彼が彼の論点 (point) に至った (come) とき、われわれは大いに (widely) 異なってしまい、われわれの見解 (views) が余りにもかけ離れて (far apart) いるので、彼の言うこと (things) は非常に (much) 独断すぎるとか、たいへん (a lot) 無意味であるとすら見える (appear) のである。」

このように、英語には、じっさい比喩表現が多いし、英語以外の SAE 言語にも多く見られるし、また、上例の和訳からも容易に推察できるように、日本語にも実に多い。従ってこの事実から判断して、世界のあらゆる言語には必ず比喩表現が沢山用いられている、と〈絶対視〉することは許されない。それは、

もしウォーフの言明が事実ならば、アメリカ・インディアン語の中で、少なくともホーピ語には上例のような比喩表現が見られないからである。ウォーフによれば、ホーピ語の表現は常に〈現実的〉であって、〈想像的〉ではない。例えば、上述の複数の例をとれば、英語の「彼らは10日(間)(ten days)滞在した」という表現は、ホーピ語では「彼らは11日目まで滞在した」とか、「彼らは10日目のあと立ち去った」とか、必ず序数で表現される。すなわち、時間の長さが、想像的な、従って、比喩的な長さでは把握されないで、前後する二つの出来事の間という、より現実的・空間的な関係でとらえられる。

ここで問題になるのは、この〈比喩〉と、すでにとりあげた〈類推〉との異同関係である。実例を分析してみると、次のようになる。両者とも、同一の〈言葉(表現)〉が、二つの異なった別個の〈意味(状況)〉として、しかも〈習慣的〉に、用いられる点では共通している。ところが、この〈意味〉または〈状況〉を更に分析してみると、〈類推〉の場合は、同一表現の指示する〈現実的〉状況が別の〈現実的〉状況に置き換えられる現象であるのに対し、〈比喩〉の場合は、同一表現の指示する〈現実的〉状況が別の〈想像的・観念的〉状況に移行される現象であり、この点で両者は異なる、と解釈できよう。従って、もし、最後に挙げたホーピ語の序数表現が、〈想像的・観念的〉状況を指示しないとみれば、ウォーフの主張する通り、その表現は比喩ではない。ただし、序数であっても、空間的・客観的に経験できない場合(たとえば〈十兆番目の〉という場合)、これを比喩表現ではない、とは言い切れないところに疑問が残る。

注

- (1) ウォーフの宇宙観については、Whorf (1942) 参照。
- (2) ウォーフの〈型の概念〉については、とくに、Whorf (1942) 及び Whorf (1940<sup>b</sup>) 参照。
- (3) Whorf (1940<sup>b</sup>), p. 223.
- (4) Ibid. pp. 229~230 参照。
- (5) Whorf (1942), p. 253.

(6) *Loc. cit.*

(7) *Whorf* (1940<sup>a</sup>).

(8) *Whorf* (1940<sup>b</sup>), p. 225.

(9) SAE という用語は, *Whorf* (1939), p. 138 で用いられている。この中には, 英語, フランス語, ドイツ語, およびその他のヨーロッパ言語が含まれ, 非インド・ヨーロッパ言語は含まれない。バルト・スラブ語については, SAE に含まれない可能性はあるが, それは疑わしいと考えられている。

(10) 〈類推〉の実例はすべて, *Whorf* (1939), pp. 135~137.

(11) *Ibid.* p. 135.

(12) *Ibid.* p. 146.

(13) この二つの用例はそれぞれ, *ibid.* p. 140 と *ibid.* p. 146.

## II 言語相対性原理

ウォーフが言語相対性原理 (linguistic relativity principle) と初めて命名し, この原理について詳しく論じているのは *Whorf* (1940<sup>a</sup>) である。しかし, *Whorf* (1939) には, この公式用語はまだ使用されていないが, 共通した見解にもとづく実証的な研究成果がみられるし, その後の三つの論文 (*Whorf* (1940<sup>b</sup>); *Whorf* (1941); *Whorf* (1942)) にも, この原理の更に発展された内容がみられる。

ここではまず, ウォーフが直接この原理に触れている定義の部分を取りあげ, 言語相対性原理のテーゼについて考察する。

「新しい相対性原理の主張点は, [宇宙の] 観察者たちは, 類似した言語的背景をもっているか, 標準化できる (calibrated) 言語的背景をもっているのではない限り, 同一の物理的現象を眺めても, 全員が, 同一の宇宙像を心に描く, とは限らないという点にある。」<sup>(1)</sup>

「著しく相異なる文法を使用している者たちは, 外的には類似した観察を行っても,

その〔異なる〕文法によって、観察するタイプや評価が相異なるような方向づけをされてしまう。』<sup>(2)</sup>

「もろもろの事実も、その事実を異なった形式 (formulation) で提供するような言語的背景をもつ話し手たちには、異なる。』<sup>(3)</sup>

以上三つの定義はいずれも、次のような〈中心テーゼ〉を含んでいる。

「〈文法〉が著しく相異すれば、その言語使用者たちの〈宇宙像〉も相異なる」

以下で、まずこの中心テーゼの理論上の背景を検討し、次に、この原理設定のために用いられた実証例を考察し、最後に、問題の所在を考える。

## A 中心テーゼ

(1) 言語機能論。<sup>(4)</sup> ウォーフは、言語が、意思や感情を〈伝達〉する機能をもつばかりでなく、もっと重要な点として、われわれの〈思考を形成〉する機能をもつことを強調する。この見解は、一方において、一般の人々がしばしば抱く〈言語素朴観〉(これを彼は「自然論理 (natural logic)」と呼ぶ) に対する啓蒙として、他方において、古くから存在する〈言語道具観〉に対する批判として表明されている。

言語素朴観によれば、概念形成や思考は、自分の使用している母語とは関係なく別途に遂行されるものであり、言語は、この独自な方法で得られた概念や思想を単に〈表現〉する手段であるとしかみない。そこでは、思想や概念それ自体と、そこに至る〈過程〉とが混同されている。しかしウォーフは、言語(の文法)がこの思考や概念形成の過程に〈作用〉し、その〈構成要因〉となっている点をよく見抜いている。

ほぼ同様なことが言語道具観に対しても言える。この見解によれば、言語は、

すでに話者の内面で形成ずみの思想や感情を聴者に〈伝達〉するために用いられる一種の〈道具〉でしかない。確かに言語には道具の性格もある点は誰も否定できない。しかし、ウォーフが重視するのは、むしろ、言語が概念や思想形成の機能をもつ点である。「各言語の背景にある言語体系(言い換えれば、文法)は、単に思想を有声化するための再生手段であるばかりでなく、それ〔文法〕自体が、考えの形成者 (the shaper of ideas) であり、個人の知的活動や、自分の得たもろもろの印象の分析や、自分の蓄えた知識の総合、などのための指針であり手引き (the program and guide) である」。<sup>(5)</sup>

文法体系が、思想や感情の単なる〈表現手段〉であったり〈道具〉であったりする機能よりも、むしろ、人間の心理の深層に潜む〈思考過程〉と密接な関係をもつ機能の方を重視し、そのメカニズムの解明に力点を置いている点は、今日の生成文法理論の旗頭チョムスキーと共通する。しかしウォーフの場合は、更に、ある文法体系をもつ言語集団に特有の〈宇宙(世界)像〉とその文法体系との関係にも分析のメスを入れている点が特徴的である。

(2) 理想的文法。ウォーフが、われわれの思考や宇宙像と密接な関係にあるとみる〈言語〉とは、実質的には、背景的性格をもつ〈文法〉を意味することはすでに指摘した。更にこの文法とは、すでに第I章で言及した通り、言語に内在するあらゆるレベルの〈型の総合体系〉である。それは、〈法則の体系〉と言っても差し支えない内容のものであった。この意味での文法が、われわれの思想や概念形成に強制力をもって作用する点についてもすでに触れた。

ただここで、ウォーフは截然と区別していないが、〈文法〉は、厳密な意味で二つに区別される必要がある。すなわち、言語学者によって記述された〈文法<sub>1</sub>〉と、言語使用者自身に深く内在化している〈文法<sub>2</sub>〉との区別である。言語学者が目指すのは、〈文法<sub>1</sub>〉をできる限り〈文法<sub>2</sub>〉に接近させることである。この意味で、〈文法<sub>2</sub>〉は〈理想的文法〉である。

文法の性格をこのように考えるならば、ウォーフの場合も、SAE語やアメリカ・インディアン語などに関する彼の文法的記述が、果して〈文法<sub>2</sub>〉に到達し

ているか否かを検討する必要がある。それは、各言語の文法が、〈総合的・体系的〉に〈文法<sub>2</sub>〉に到達していることが確認されて初めて、異なる言語の〈文法比較〉に関する記述に対して真の〈信頼性〉が生まれるからである。そして〈文法<sub>1</sub>〉が〈文法<sub>2</sub>〉の水準に達しているか否かを測る具体的な基準は、すでに述べた〈産出性〉、〈予測性〉、〈正確性〉などである。

(3) 作用の方向性。<sup>(6)</sup> 上に述べた意味での〈文法〉が、〈思考〉に作用する際の方向性について、ウォーフは文法の方を作用の〈起点〉と考える。しかも、すでにみた通り、作用の仕方は〈強制的〉な性格をもつ。このため、文法が著しく異なる場合は、思考方法も異なり、従って世界の〈認識方法〉も異なる。第I章でみた英語の音韻型が、言語の下位レベルで個人の〈行動〉を強制的に〈コントロール〉しているのと同様に、思考を含むあらゆる上位レベルでも文法が強制的に作用する点について、ウォーフは以下のように述べる。

「思考もまた、与えられた言語に敷かれている網の目のような軌道——実在や情報の、ある特定な面にのみ規則正しく集中し、他方、他の言語において特徴的な面は規則正しく無視するような組織 (organization)——に沿って働く。個人はこの組織には全く気づいてはいないが、この破ることのできない束縛を完全に受けている。」<sup>(7)</sup>

そして更に、言語と宇宙認識について、「言語の一変化が、われわれの宇宙認識を一変させ得る」とまで言及している。<sup>(8)</sup> 換言すれば、〈言語〉が広い意味での〈もの〉を〈あらしめる〉のであって、その逆ではないとする、古来有名な〈唯名論〉の立場を支持する見解である。

(4) 思考世界の内容。<sup>(9)</sup> 中心テーゼの〈宇宙像〉は、実際には〈思考の世界〉に現われる。ウォーフによれば、この思考世界は、ただ〈言語の型〉のみが含まれる世界ではない。彼はそれ以外に含まれるものとして、(a) 言語の型が指示する類推的・暗示的 (suggestive) な価値のすべて (想像上の空間や、その深い裏の意味); (b) 言語と文化総体との間でやりとりされるもので、非言語的で

はあるが言語の形成的影響を受けているものすべて、などを挙げている。すなわち、思考の世界とは、「人間ひとりひとりが身につけている小宇宙 (micro-cosm) のことであり、それによって人間が〔外界の〕大宇宙 (macrocosm) を測定し理解している」世界のことである。<sup>(10)</sup>

## B 具体例

以上、中心テーゼの理論的背景の中で重要と思われる点を四つだけ考察したが、これを踏まえて次に、このテーゼのいわば〈証拠〉として提出されている具体例のいくつかを検討してみよう。

(1) まず、第 I 章 B であげた〈類推〉に関する例。これは、英語を母語とする人々が、英語のある特定語句に対し、〈習慣的に〉かつ〈一様に〉ある特定の〈類推〉を行ったため、別言すれば、ある特定の〈宇宙像〉を心に描きそれに従ったため、ある出来事（火災）が発生した例である。

(2) 次に、〈平均的ヨーロッパ標準語 (SAE)〉を話す人々と〈ホープ語族〉との比較例。ウォーフによれば、SAE 語族は一様に習慣的に、実在の世界（大宇宙）をすべて〈形相 (form)〉と〈質料 (substance)〉の結合と認識している（つまり、これが彼らの小宇宙）。別言すれば、実在はすべて〈空間的形式〉と、非空間的時間のような〈無定形の連続体〉とに二分される。非空間的実在も、想像の中では空間化され、二分される。<sup>(11)</sup>

他方、ホープ語族では、実在はすべて〈出来事または起ること (eventing)〉の連続として把握される。SAE 語族と異なり〈動的に〉大宇宙を認識している。すなわち、「すべてのものが、初期の相によって今現われているような相に準備されてしまっており、現在の相が今後どう変わるかは、部分的にはすでに準備されているし、また部分的には準備されている最中である。〈物体 (matter)〉や〈材料 (stuff)〉がわれわれにとって〈実在の特質〉であるように、ホープ語族にとっては、世界の準備しつつある、または準備されつつある相が、強調され重視さ



れる」。(12)

以上のように対照的な宇宙像は、両者の文法構造に由来する、と考えるのがウォーフの見解である。たとえば英語では、単語の多くが〈名詞〉と〈動詞〉に二分されるのに対し、ホービ語では、英語の各詞表現に相当するものの多くが動詞で表現されるので、英語式の二分は適切ではない。ホービ語では、すべてが〈出来事〉としてどれくらいの〈継続期間〉をもつかによって、動詞的あるいは名詞的表現となる。例えば、〈稲妻、波、炎、流星、ひと吹き煙、鼓動〉など英語の名詞表現は、短時間しか継続しない出来事であるため、動詞的に表現されるし、〈雲〉や〈嵐〉などに至って初めて、名詞的に表現されるのに必要な最少の継続期間をもつ出来事と考えられている。ホービ語族の宇宙像がこのように出来事の連続体であるのに対応して、その文法範ちゅうも截然と二分され難い連続体をなしている、とみる。(13)

同様なことが〈物量名詞〉についても見いだされる。SAE語では〈物量名詞〉は、〈個体名詞〉(例、'a tree', 'a stick' など)と〈物質名詞〉(例、'water', 'milk' など)に二分される。前者は〈形式〉をもつが、後者は〈無形式〉と考えられている。この二分法は、英語の型にもはっきり現われている。例えば、'stick of wood', 'piece of cloth', 'cake of soap' などの慣用句には、〈質料〉('wood', 'cloth', 'soap')の〈個別化〉('stick of～', 'piece of～', 'cake of～')がみられるし、更に 'glass of water', 'cup of coffee' などの表現においても、〈容器〉が〈個別化〉の役割を果たしている。このようにすべてこの種の慣用句は、みごとに〈形式プラス無形式〉の型をもっている。実在を必ず二項目の組み合わせに分析することは、SAE語族には〈常識〉であって、その要因はその言語の型に存在する。(14)

他方、ホービ語では、名詞はすべて〈個体名詞〉であって〈物質名詞〉は存在しない。SAE語の物質名詞の翻訳として最も適切なホービ語でも、なお漠然とした物体とか、漠然とした境界をもつ広がりの意味する。たとえば、ホービ語の 'water' は、ある固まりまたは量の水のことで、水という〈物質〉ではない。

このように名詞は常に個別化されているので、特別に形や容器を強調する必要がある以外は、上例の英語のように個別化する必要はない。従って、‘a glass of water’は *ka·yi* (‘a water’), ‘a piece of meat’は *sik<sup>w</sup>i* (‘a meat’) でよい。ホーピ語では、実在を〈有形〉と〈無形〉に二分する必要もないし、そのような類推もない。<sup>(15)</sup>

(3) 英語とアメリカ・インディアン語とを、〈文〉の単位で比較した例。<sup>(16)</sup> 初めに、英語ではほとんど〈類似〉していない二つの文が、同等の意味をもつショーニー語 (Shawnee) では、〈類似〉している例。すなわち、‘I pull the branch aside’ (私はその枝をわきへやる) と ‘I have an extra toe on my foot’ (私の足には余分な指が一本ついている) の二文にはほとんど類似性が見い出されない。しかし、同じ内容をショーニー語では、それぞれ、*ni-l’θawa-’ko-n-a* (‘I pull it (something like a branch of tree) more open or apart where it forks’= 私はそれ (木の枝のようなもの) が分岐しているところをもっと拡げるか引き離す) となり、*ni-l’θawa-’ko-θite* (‘I have an extra toe forking out like a branch from a normal toe’= 私には余分な足指が普通の足指から枝のように分岐して出ている) となり、形式と意味の両面の類似性からわかるように、二つの現象を、本質的には類似したものとして把握している。

上と逆の例として、英語では〈類似〉している二つの文が、ヌートカ語 (Nootka) では、〈相異〉する文で表現される例。すなわち、英語の ‘The boat is grounded on the beach’ (ボートが岸に乗り上げられている) と ‘The boat is manned by picked men’ (ボートには選ばれた人々が乗り込んでいる) の二文はかなり〈類似〉している。ところがヌートカ語では、それぞれ、*tlih-is-ma* (The boat is on the beach pointwise as an event of canoe motion= ボートは岸にあって、あらゆる点でカヌーの運動 (方向) のようである) となり、*lash-tskwiq-ista-ma* (They are in the boat as a crew of picked men= 彼らは、選ばれた者からなる乗組員としてボートに乗っている) または (The boat has a crew of picked men= ボートには、選ばれた者からなる乗組員がいる)

と表現される。英訳では必要上、‘canoe’や‘boat’のような名詞を補っているが、ヌートカ語には、これに相当する単位の語は含まれていない。ヌートカ語では両文が、かなり相異している点は、形式からもわかる（3人称直説法の印である *-ma* 以外はほとんど異なってる）が、意味の上でも、前者は〈方向指示〉として表現されているのに対し、後者は、選ばれた者と乗組員に関係した出来事ぜんたいが〈進行中〉として把握されている。

以上、ウォーフが中心テーゼを論証するために用いている数多くの実例の中から、特に問題となると思われるものを三種選び要約してみた。以下でこれら一連の具体例が、果して中心テーゼを立証するために必要かつ十分な根拠となっているかどうか検討してみる。（なお、中心テーゼの理論的背景に関するA項も参照）。

## C 問題の所在

(1) の例に関して言えば、これがわれわれの問題としている中心テーゼを立証する根拠になるためには、この種の〈類推〉が全くか、かなり欠落している言語を話す人々がまず存在し、この人々が英語例であげたものと同一の（または類似した）状況のもとに置かれても、言葉による類推がないため、英語を母語とする人々のような誤った〈宇宙像〉を心に描いたり、従ってまた、誤った〈行動〉をとったりしないことが確認される必要がある。この種の比較はまだなされていないので、類推の例が中心テーゼのための十分な根拠になるとは思われない。むしろこの例は、すでに触れたように、〈言語〉が〈もの〉をあらしめるといふ、中心テーゼに伴ういわば〈付随テーゼ〉の証拠となるものと言えよう。この場合は、英語例だけで他の言語にはたとえ見られないとしても、付随テーゼに必要なかつ十分な条件は満たしている。

(2) の例に関しては、(1) の例と異なり、英語とホービ語という二言語間

の文法上の比較と、それに対応する宇宙像の比較がなされているので、問題の中心テーゼの立証に〈必要な条件〉はまず満たしている。しかし〈十分条件〉も満たしているか否かが更に吟味されねばならない。これに関して以下に二点だけ、主要と思われるものをとりあげる。(a) ウォーフは、SAE 語の代表としての英語と、ホーピ語、ショーニー語を含むアメリカ・インディアン語の、二つに大別される言語群の間に、〈著しい文法上の相異〉を発見しているわけであるが、まず問題なのは、各文法が同一の理論的基準（または原理）と方法で記述されているかどうかである。すなわち、比較言語学の原理にかかわる問題である。言語を含め一般に、有意味な比較が成立するためには、ある一定の〈比較基準〉が必要である。ウォーフの場合、この種の理論上の問題が明確にされていないため、(2) のような比較例において、彼の主張する通り実際に〈著しい〉相異か否かは速断しがたい。しかしこの(2) の例に典型としてみられるように、ウォーフが SAE 語の文法上の〈範ちゅう〉を常に〈2 項の結合〉、〈二つの非連続体の組合わせ〉として分析していること自体、彼自身拒否しながらも、いぜんとして〈ラテン文法〉の視点からアメリカ・インディアン語をみて、そこに SAE 語とは全く逆の、〈連続体〉としての文法範ちゅうを発見した、と言えないだろうか。文法範ちゅうの問題を単語や短い名詞句に限定し、〈文〉を中心とした統辞論上の比較は、その必要性は説かれながらも実際には詳しく行われていない点も、〈ラテン文法〉の原理にとらわれていることを示唆している。いずれにしろ、文法の比較においては、有効な理論上の枠組なくしては有意味な成果は得られない。結論として、(2) の例による論証は、中心テーゼを十分根拠づけるものとは思えない。(b) ウォーフは、英語をはじめ SAE 語の文法範ちゅうには、〈2 項の組合わせ〉が著しくみられ、〈故に〉その言語を話す人々は〈大宇宙〉をも常に 2 項の組合わせとしてみる、他方、アメリカ・インディアン語にはそのような範ちゅうはなくむしろ〈連続体〉がみられ、〈故に〉彼らは大宇宙をも連続体としてみる、といういわば〈文法原因説〉を主張しているわけであるが、この点についても疑義がある。それはすでに触れた通り、彼の

記述する〈文法〉が、果して〈理想的文法〉にどの程度接近しているかという問題である。すぐ上で述べた通り、〈ラテン文法〉の域を脱していない面が見られるし、各言語の文法記述もまだ十分なほど総合的な段階に至っていないので、この〈文法原因説〉には、まだ不確定要素が少なくない、とみるべきであろう。

(3)の文例の比較に関しても、(2)の例について述べたことが妥当するが、この場合はなによりも、文の〈表層構造〉における比較にとどまっていたり、〈深層構造〉における〈類似〉とか〈相異〉を問題としているのではない点が指摘されなければならない。言語学の発達に伴い、表層構造では著しく異なって見える言語も、深層構造ではかなり類似していることが判明してきている今日、ウォーフの挙げる文例を深層構造の面からも比較し直す必要がある。この意味で(3)の例は、(1)(2)とは異質の問題を提起している。

以上、事例に即して問題点を列挙してきたが、総じて言えることは、この中心テーゼは、理論面でもデータ面でもまだ立証するに十分な段階に至っていないことである。従って〈仮説〉と呼ばれているわけであるが、われわれは今その理由をできるだけ詳しく考察してきたことになる。

## あとがき

〈言語と認識〉の関係を研究する上でどうしても通過する必要がある関門—言語相対性原理を、その背後にある言語構造論とともに検討し、問題点を明らかにしながら今後の研究に役立てようと、ウォーフの言語思想を学んで来たのであるが、さまざまな問題を残したまま、ひとまずこの稿を閉じなければならない。

そこで最後に、この残された問題を若干あげてみることにする。(1) まず、

ウォーフの文法理論の中で重要な位置を占めている、〈かくれた (covert)〉文法範ちゅうと、〈あらわな (overt)〉文法範ちゅうとの区別、および、単語分析に用いられている〈ゲシュタルト法〉、などの評価；(2) 言語相対性原理の発展に寄与した彼の師サピアの言語思想との関連づけ；(3) ウォーフの言語思想に影響を与えている〈直感神知学 (Theosophy)〉の内容；(4) ウォーフの言語相対性原理の実証面を評価する上でどうしても必要なアメリカ・インディアン語の十分な知識、などである。

以上の問題を更に追求しながら、一方において日本語と英語の文法を比較し両言語民の思考・行動・文化との関係を探る、という筆者自身の実証的研究を進め、その成果を次回で発表する予定である。

注

- (1) *Whorf* (1940), p. 214.
- (2) *Ibid.* p. 221.
- (3) *Whorf* (1941), p. 235.
- (4) ウォーフの言語機能論については、とくに *Whorf* (1940<sup>a</sup>) を参照.
- (5) *Ibid.* p. 212.
- (6) 作用の方向性については、とくに *Whorf* (1942) を参照.
- (7) *Ibid.* p. 256.
- (8) *Ibid.* p. 263.
- (9) 思考世界の内容については、とくに *Whorf* (1939) を参照.
- (10) *Ibid.* p. 147.
- (11) *Loc. cit.*
- (12) *Ibid.* p. 148.
- (13) *Whorf* (1940<sup>a</sup>), p. 215.
- (14) *Whorf* (1939), p. 141.
- (15) *Ibid.* pp. 141~142.
- (16) *Whorf* (1941), pp. 233~236.

参考文献

Carroll, John B. (ed.) (1956) : *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*; M. I. T. Press.

以下の論文は、すべて上掲書に含まれている。なお、頁数も上掲書のもの。

Carroll, John B. (1956) : “Introduction”, p. 1~34.

Whorf, Benjamin L.(1939) : “The relation of habitual thought and behavior to language”, pp. 134~159.

—————(1940<sup>a</sup>) : “Science and linguistics”, pp. 207~219.

—————(1940<sup>b</sup>) : “Linguistics as an exact science”, pp. 220~232.

—————(1941) : “Languages and logic”, pp. 233~245.

—————(1942) : “Language, mind, and reality”, pp. 246~270.